

フリースクール・フォロ1周年記念講演

不登校は 文化の 森の入口

2002.09.08 渡辺位^{さん} 講演録
(児童精神科医)

不登校は文化の森の入口
フリースクール・フォロ1周年記念
渡辺位さん講演録

頒 価 100円
発行日 2003年4月15日
発行者 特定非営利活動法人 フォロ
〒540-0025 大阪市中央区徳井町1-1-3
TEL06-6946-1507 FAX06-6946-1577
mail to: info@foro.jp
URL <http://www.foro.jp>

不登校は文化の森の入口

〜渡辺位さん記念講演〜

今日の講演のテーマは「不登校は文化の森の入口」ということですが、この言葉は、現在、とくに強調しているわけではなくて、だいぶ以前、講演中に、ふとつぶやいた言葉でした。演題はいつも先方に決めていただくことにしているんですが、これをテーマにされたのは初めてです。

しかし、これまでの私にとっては「不登校は文化の森の入口」だったんですね。登校拒否・不登校と出会って、そのなかでいろんな気づきがあり、自分の生き方に影響があった。そういうことを考えるのは、本当は若いうちにやることなんでしょうが、私は不登校とつきあいだしてからのこと、30代半ばから40代にかけて、物事の考え方について、次々に発見がありました。いい齡して何やってんだと思いますが、それを承知で、今日は、その足跡をもう一度たどりながら話してみようかと思っています。ですから、あまりまとまりがないかもしれませんが（笑）。



戦争神経症と不登校

私が勤めていた国府台病院こふのたいは、戦時中は陸軍病院でした。戦争するために兵役に服することになった人たちが戦争神経症になったり、銃弾を受けて神経系を侵おかされたりした方たちの精神神経系の治療をする病院でした。

あの当時は、国民は天皇制国家を護持するための人的資源とみなされていた。戦争に行けば命をかけて戦うことが至上命令。「大日本帝国の臣民」というタテマエを果たさなければならぬ。しかし、人間は命ある生き物で、長生きしたいとか、家族と別れたくないとか、いろいろな感情がある。でも、国のタテマエに合わせなければ、この国の国民として

生きていかれないという義務感との分かれ道のなかで、葛藤が起きれば、神経症が起るわけですね。考えてみれば当然のことです。

登校拒否・不登校と関わりはじめて、ふと気がついたのは、この戦争神経症の話でした。

恥ずかしい話ですが、私は当初、社会の常識とかタテマエといった尺度で不登校状態にある子どもたちを診ていて、子どもが学校に行かれるようにすることが治療だと思っていました。

ですから、その原因として脳の働きのどこかに異常があるのではと思って脳波をとってみたい、心理テストをやらせてみたい……いま思えば、どうしてそういうふうには考えられなかったのかと思います。実際、そういうことをしていました。

しかし、登校拒否と考えられる多くの子どもたちと接しているうちに、これは戦争神経症と同じようなことではないかと思いはじめたんです。神経症になったら、戦場では戦えない。そのために命だけは救われる。自分でそうしようと思つより、意識下の生き物としての命の声がある人にそういう行動をとらせている。表面の意識では一生懸命戦って「天皇陛下のために死のう」と思っている、命としてはそうさせなかったわけなんです。

そこで、子どもだって生き物だから命があるんだと、当たり前のごとに改めて気づいたんです。子どもにとって、学校との関係で、そういう事態が起こるのだとすれば、学校とは何なのか。学校の日常が戦争といっしょとまでは言わなくても、どこか生き物としての子どもがその子

どもであるうとするのを脅かすような場所なのではないか。もしそうであれば、戦争神経症と同じようなことが起きてもおかしくないのではないか。

そういうところから学校を見直してみると、学校がいかにおかしなことになっているか、よく見えてきたんです。当時から学校教育関係者ともつき合いがあり、そういう人たちが子どもや親と向き合う姿勢などを見ていると、子どもがこつこつという状況になるのも不思議ではないと思えたんです。

そして、学校って牧場だ、と思いました。国家権力が人間の子どもを、国家体制に御しやすいような状態にしている。国家は、戦争がはじまったら兵隊になるような考え方を持たせるし、経済成長がはじまれば、産業戦士に育成していく。学校は、そういう考え方を植えつけていくためのシステムにすぎないのです。

現在も3カ所の教育委員会と関係があつて、そのうちの1カ所では地元の学校をまわって、授業場面を見て、教師に助言する仕事もしていますが、学校現場では、子どもを“命ある生き物”としての人と必ずしも認識しきれてなくて、操作・支配の対象と考えるという皮相的な見方は、いまだに変わらないですね。学校教育は、必ずしも、いつも子ども側の側で機能する聖域ではないんです。

何と面接していたのか？

私は20代の後半から精神科医をはじめました。いまは薬の種類もたくさん出てきて、強迫神経症なんかは薬物療法の対象と考えられている。それがいいかどうかは別として、現実の医療現場ではそうなってきたりしています。

しかし、昔は薬といえば眠り薬ぐらいしかないので、神経症といえば、むしろ心理療法、精神療法が主流でした。

それは、具体的には面接をするわけですが、指導・助言をしてくださった上司が「心理療法のゴールは理解すること」と、くり返しおっしゃっていました。しかし私は、心理療法のゴールは相手の自分の基準に合わせて変えることだと思いこんでいたんですね。

だから、理解することが大事だと言われると、相手の人の状況を学問的に理解することだと思っただけ、一生懸命本を読んだりしていました。だから、せっかく相手の人が目の前に来ているのに、その人自身を見ないで、読んだ本の何ページの何行目に何が書いてあったとか、そんなことはかり考えていた。何と面接していたんでしょうかね？ その人が来るというのは、自分が知識を得

るための本を読むきっかけだけ。だから、本と面接しているようなものでした。本は理解しても、その人を理解していることにはならない。たとえば、相手の状態に強迫神経症という診断名をつけたとすると、面接に来るのは強迫神経症が来るわけじゃない。そう診断された人が来るのに、その人をどっかにやっつけてしまっていた。自分のつけた診断名にとらわれて、当の人そのものの存在を忘れていたわけ。

そこに気がついたとき、結局、理解するというのは、相手の状況を理論的に理解するということではなく、自分が相手とどう関わるうとしていいのかを理解することだと気づいたんです。つまり、面接しようとしている自分自身のありようですね。

大人が子どもに関わる時、まったく同じことが言えると思うんです。大人の思いこみで子どもを決めつけたり、追い込んだりしていないかって。

くるみの実

うちにくるみの木があるんですが、実が地面に落ちると、自分から殻を割って芽が出てくるん

ですね。当たり前といえば、当たり前の話です。ところが人間が殻を割ろうと思ってても、固くて、簡単には割れない。それなのに、イモムシにだって簡単にかじられてしまうくらい柔らかい芽が、大地と出会ったとき、あの固い殻を破って出てくるわけでしょう。これは、命ある生き物はみな、その条件さえ整えばそれなりの動きを自らするものなんです。この自然のメカニズムには、いたく感動しました。

自然界にはもともと、生き物が生き物として存在するための掟、というか原理原則があるんです。宇宙の意志でもある。その宇宙の原理原則、意志と人間の意図とはイコールではなく、むしろ相反することが多いんです。だから子どもだって、これは生き物ですから、大人の思いこみで一方的にどうにかすれば済むものではなく、子ども自身にとっての条件をおろそかにしてはいけないんだとわかってきます。

前提を疑う

世の中にはネコがいたり、犬がいたり、ヒトがいたりしますが、よく考えてみると、それぞれ

はもともとネコ、犬、ヒトというものではなく、それは人間が勝手に枠はめして分類されたものですよね。つまり、元来、本質的な実体として存在しているわけではない。たとえば、(ボールペンを手にとり)これはボールペンだと思っている。たしかにボールペンとして製造されたのだろけれど、このとがった先で頸動脈でも狙えば凶器にもなる(笑)。腕時計だって、時計としても使いますが、風の強いときに、ちょっと書類を押さえるのに文鎮がわりに使ったりもしますですよ。いつも一つの物は固定的にその機能だけを果たしているわけではない。

戦争中、せつせと国家の命令で殺人をしていた人は勲章をもらっていたのに、戦争に負けたとたんに犯罪人になる。世の中の価値も逆転するし、固定的なものではない。登校、不登校も同じでしょう。だから、よく考えてみると、この現実の社会はそういう幻想世界のなかで物事を区別しているにすぎない。

つい、我々にはいろんな理屈があって、物事はすべて理論で解決できるかのように思いこまされていきます。つまり、理論は何ごとにつけ絶対不変であるように、うっかりすると信じてしまっている。でも、その理論は、その前提がなければ成り立たないものですね。

本当の話かどうかわかりませんが、エジソンは子どものころ、なんで3+5=8になるのかわからなかったそうですが、改めて考えてみると、数理論的には、十進法だから8になるわけですよ。五進法だったら3になる。エジソンも、もしかして、そういう前提について考えていたの

かもしれない。だから、何かに行きついたら、その発想の前提を変えてみる、あるいは考え直してみるのだと思います。流動的に、もっとちがった筋道を考えてみる。

たとえば車が穴に落ちてしまったとき、前に進もうとすると出ないけど、バックにすると出ることがありますでしょう。前進を目的にしているんだから、そこだわるど、いつまでも出られない。

従来の常識とか理屈だって、ただただ絶対とするのではなく、一回疑ってみる。あるいは、なぜそういう考えが出たのか、根源にまで遡って考えてみる。そのように、いかにして柔軟な発想が持てるかどうか。人が生きるうえで、そのあたりが大切だと思うのです。

不登校問題だって、子どもは学校に行くものだ、という前提で問題になるわけです。あるいは学校は絶対的に大切なところと決めるから、学校でうまくいかないという「学校不適應」という。

ネコは何と鳴くか

私はネコとのつき合いが長くて、いまも3匹のネコがいます。そのうちの1匹のネコは、なんて鳴くと思いますか？ ネコは一般に「ニャーニャー」と鳴くと思われていますが、そのネコは「ワ

ンワン」と鳴くんです。イヌほどの迫力はないですが、興奮すると、ますますワンワンという。

このネコは、去年の1月半ばごろから「修行」をはじめたんです(笑)。道元禅師の『正法眼蔵』に、「只管打座」という言葉があります。ただ、ひたすら座りなさいという意味で、香をたいたり、お経を読んだり、拜んだり、そういうよいけいなことをするより、ただひたすら座れというよな意味です。しかしもっと深い意味は、ただひたすら「存在」せよという意味だと思っています。非常にいい言葉だからと思って、「ロビー」して額にいれて戸棚の上の壁に下げておいたんですね。そうしたら、その額の前に座るようになったんです。まさか座禅はしませんか(笑)。その理由として、そこが暖かいからだろうとか、何か映るんだろうとか、いろいろ憶測してみました、なんで座るかはそのわからない。

私も以前は、本来の「ネコ」といえるネコがいないと思ってたんです(笑)。以前、親の会で、「典型的なネコを描いてください」と言われて、描いてもらったことがある。しかし、典型的なネコなんていない。ということは、これこそ本当のネコですと言えるネコなんかいないということになります。だから、うちには3匹のネコがいるけど、「ネコ」はいなくなっちゃった(笑)。家出したんじゃないですよ。何ととも1つの枠や尺度では決めつけられないものだと思われました。

もう1匹のネコは、感動すると「ワオー」と言います(笑)。このネコは、ブラシをかけてやら

ないと気が済まないんです。朝の9時半になると、必ず来る。膝の上でコロコロして、そのうち、そのネコなりにOKになると、自分で自分の体を舐め出す。しかし、こっちが別のことを考えていたり、ついテレビがおもしろかったりで、気が散っていたりすると、いつまでもOKにならない。気を入れるという言葉があるが、そのネコとの関わりには、その状況にこっちもひたりきって、それになりきったとき、満足する。それがネコにはピンとわかる。その場になりきるということ。

人が人と関わるときも、それは状況にもよりますが、たがいにその場を共有する、共に在るということは、そういうことなんだろうと感じました。

一方的な関係では……

去年の暮れ、ある高校で講演を頼まれたんですが、そのときのテーマが「いまどきの高校生と付き合うには」というものでした。このテーマは、考えてみると、ちょっと変です。「いまどきの高校生」と言った時点で、付き合うということは断絶している。なのに、「と付き合うには」

というのは矛盾しているでしょう。

しかし、そういうことがけっこうある。以前、不登校を経験され東京シユーレに長くいた方と話し合ったことがあったんですが、その方が、よく「いまあなた何しているの?」と尋ねられるんだと言われるのです。尋ねるほうは「今」とは言っても、相手の本当の「今」より、尋ねる自分が決めている相手の状況を考えて発言しているわけです。この場合、自分が相手と向き合っている「今」を考えたら、「いま、あなたと話しているよ」と言っつのが正しいんですね。本人を前にしながら、本人を忘れてはいるわけです。

子どもを前にしながら、子どもとコミュニケーションをとれないとか、うまく会話が成り立たないとか、言われる親の方がおられますが、子どもが親にとって、ある状態を呈していると思えたら、その状態を誘発するようなことを親自身が子に対して今していることに気づかないといけない。自分中心の一方的なコミュニケーションを求めていけば、コミュニケーションなんて成り立つわけがない。コミュニケーションとか会話とかは、相互性のなかで成り立つものです。学校もそうでしょう。学校の先生が子どもに求める約束は、たいてい一方的で、約束じゃない。強制的命令で、相互性がない。

大人は、子どもに「死にたい」と言われたとき、「命は大事だ」とか、もっともらしい話を聞かせたりしますが、少なくとも、子どもが「死にたい」と言っているとすれば、それは、その大



人との相互関係のなかでの発言なんです。だから、その状況のなかでの発言なんだと考えなくてはいいけない。お母さんに言ったとすれば、お母さんといえるのに生きがいを持たないと感じての発言かもしれない。日常会話はアドリブでしょう。その場そのときでの言葉。ただのサインではない。おたがいがおたがいの気持ちや態度を誘発している。だからAさんがBさんに会っているときは、Bさんに会っているAさんであり、Cさんに会っているら、Cさんに会っているAさんになる。おたがいがおたがいを規定し、創出しあっているんです。こうしなさい、あしなさいなど、言葉で何を言ったかではなく、親が「うちの子はいつまでもこもっていて」「このまま学校に行かなかつたら先々どうしよう」などと思っているとすれば、そのような親と子との相関のなかで、いろいろなこと

が起こってくることは想像にかたくないですね。弱い子、困った子と親が決めてしまえば、その子自身、自分はそんな子だと思ってしまふものです。

心はどこにあるか

あるとき、教育関係の職員から、「心はどこにあるんでしょう?」と聞かれたことがあって、そのとき、私は「場でしょう」と答えたんです。おたがいが、おたがいに関わりあって、ある場をつくっているときに、そのたがいのつくる場に現れる精神現象が心では、ということ。だから心は、個人の内面のなかに固定してあるのではなくて、場のなかにある。外界との相関の場ですね。だから、場が個人の内面であることもありえますが。

ある科学雑誌の座談会で、最先端の脳科学研究者の言葉に、似たような発言がありました。脳というのはデザインも目的も持っていない。はじめからある目的があって、神経繊維を伸ばすのではなく、そのときどきの状況のなかで、それにふさわしい神経繊維のネットをつくっていくのだそうです。つまり、「今」といつ刹那と無関係に目的やそれに沿ったデザインを先走って計画

しているのではない、ということです。

迷子を辞めるには

最近、迷子になったんです。自分の住んでいる街を歩いて40分くらいで着くはずなのに、いくら歩いても着かないんですね。数年前にも行ったことがあったところだったんですが、どこでどうまちがったのか、途中で道がわからなくなった。時刻を決めてあったので、あわてたり焦ったりして、迷子になったと思った。週日の昼間は、住宅地だから、人もいないし、公衆電話もない。携帯電話なんてものも持ってない。焦りましたね。

しかし、そこで気づいたんです。なんで迷子になったのかなと思った。ただ、たんに道をまちがえたから、それで迷子になっているというだけではない。そこで焦ったり慌てたりしている。なんで焦るのかといえば、何日、何時に必ずそこに到着しなくては、という目的があるからなんですね。だから、迷子をやめるには、電話して約束をキャンセルすれば、それで迷子ではなくなる。いままで歩いたこともない知らない街を歩いているんだから、そこに物めずらしい新しい発

見も感動もあつたはずなんです。しかし、そんなことやっているヒマがない。

人生もそうなんだなと思つたんです。人生で迷うこともよくあつて、あわてたり焦ったり、葛藤することがありますが、それも何が何でもこうでなくてはならないという目標や目的を持つから、その通りにならないと、迷つたり、悩んだりする。しかし現実なんて、何ごとにつけ、よく言うことですが、なるようになるけど、なるようにしかならないんですよね。

だから、迷子になったら、迷子をやめればいい。つまり、人生に迷うことがあつたら、何がなんでもといった物事へのとらわれを捨てればいいんだと思いました。

生きるということ

生きるということとは、月並みな言い方をすれば、生きがいのある「生」が営めているかどうか、ということだと考えます。

摂食障害の末、餓死に近い状態で亡くなる場合もあるようですが、それは食糧や経済に行きつまったためではなくて、いまの自分のありようや存在が、ある考え方からすると自分自身で受け

いられないことによるためではと思われず。

“生きる”ということは、何か特別なことをするためとか、目的をもってではなくて、ただただ、日々の生活のなかで、生きていてよかったと素直に実感できるかどうかにあるのではないでしょう。時々刻々、めぐりあう外界（自己内面も）の状況に、ごく自然に、そして新鮮さをもって揺さぶられる心が持てる、感動できる、ということ。社会的常識、理屈などの枠組みや尺度に縛られて自分の内面にわき出す感性をいつも否定して

いては、そのような心の感動は得られません。

不登校状態にある当事者のなかには、死にたい、消えてしまいたいと、自己の存在を否定される方が少なくありません。それは、生きることへの方向や目的など、大人たちの示す枠づけを取り入れて、生きがいを失うからと言えるでしょう。

人の“生きること”の価値は、自然の営みそのものの中にあるのだと考えます。自然の営みに謙虚であることこそが、生きることへのこの上もない保証だと思っています。

「文化の森の入口」のわけ

私は、登校拒否・不登校と付き合っているうちに、いつの間にか表面的に物事を見るのではなく、もう一歩踏み込んでみたり、逆の見方してみたり、なぜなんだろうと改めて疑問をもって考えてみるのが日常的になって、新しい発見や感動をたくさんもつことができたと思います。

精神活動によって新しい価値を創出すること、そして、それによって人間の営みを充実、向上させることが文化なんだそうですね。

私にとって、不登校・登校拒否と出会ったことは、自分自身の今の生きようの一つのきっかけになったんです。だから「文化の森の入口」だと思ったのです。

最近、迷子になったりするし、だいぶボケてきたけど（笑）、生きていくかぎりは、まだまだ新しい発見も創造もあると思います。

ありがとうございました。

（2002年9月8日 フォロ1周年記念集会・記念講演「不登校は文化の森の入口」より）